

林芙美子「ボルネオ ダイヤ」論

―二項対立図式の明暗―

はじめに

戦時下の一九四一年より、日本の文学者、文化人が続々と軍に徴用され、^①その一人であった林芙美子もまた、一九四二年十月から一九四三年五月までの間、陸軍報道部報道班員として仏印、蘭印に派遣され、シンガポール、マレー、ジャワ、ボルネオ、バリ、スマトラ、フィリピンなどに滞在した。彼女の南方での足跡については、山下聖美の現地調査^②にて詳しく検証されている通りだが、その時の南方体験を下敷きに書かれた最初の作品が、戦後一九四六年六月に『改造』に発表された短編小説「ボルネオ ダイヤ」であった。

ボルネオ島は現在、インドネシア、マレーシア、ブルネイの三国によって分割統治されているが、一九四二年までは、島の北部及び西部はイギリス領、南部から東部にかけてはオランダ領であった。太平洋戦争が勃発し、一九四二年十二月中旬に日本の陸海軍が上陸して攻略を開始し、一九四三年二月頃には島の全域が日本の占領下に置かれることとなった。林芙美子がボルネオに到着したのは、まさにその陥落直後のことであった。

「ボルネオ ダイヤ」は、南ボルネオを舞台としており、内地女性「球

阮 文 雅

江」は、同じ女給をしている仲間たちと、バンチャルマシンの川辺の宿に住んでいる、という設定となっている。作品に描かれているマルタプウラ川の風景や、「球江」と付き合っているある軍属の存在、「真鍋」が働いていたマルタプラの町のダイヤモンド工場などは、いずれも実際に現地で確認できるものである。この戦時中のボルネオを舞台とした作品で、「球江」が当地で春を売ることになった経緯の回想に始まり、さらにはそこで出会った仲間や恋人との関係などが描かれていく。「ボルネオ」は戦後の一九四七年に「雪の町」「あひびき」「河沙魚」などの諸作品と合わせて『淪落』に収録され、関東出版社より刊行されている。^③

林芙美子是一九三〇年に発表した「放浪記」で高い評価を受け、本格的に作家活動を始めた。林の戦前作品は、その主人公の多くが常に一人で職を転々として生きていくとする女性であったことから、一種の私小説として読まれることもあったが、^④尹小娟は林芙美子の南方体験作品という設定に着目して検証を加え、「主人公の南方行きの経緯という点で」、戦後の一九五一年に完成された名作「浮雲」が、「『ボルネオダイヤ』の延長線上に位置している」と指摘している。^⑤本稿では、それらを踏まえ、「ボルネオ ダイヤ」という作品が、方法的にも林芙美

子の戦後作品の先駆的な存在であったことを示してみたい。

「珠江」は、喫茶兼酒場の仕事で何人かの日本人男性と知り合い、彼らから物資やお金などを受け取っているのだが、「眞鍋」という名の男もその一人であった。彼女は運命に翻弄されつつも戦争を生き抜いていくのだが、林芙美子のほかの作品との共通性を想起させるかのように、「ボルネオ ダイヤ」でも一見、「落魄の思ひ」を抱くような女性の運命が描かれている。

物語内の出来事が生起する時間は、およそ一日という短い間に過ぎないが、その中で、注目に値するのは、そのごく短く単純な作品構造の中にあつて、視点が女性からのものではなく、男性の視線からも語られているという点である。冒頭から「珠江」の回想が綴られ、夕方同部屋の仕事仲間「澄子」と船に乗りに出かけるが、戻ると、「珠江」は男客の接待に座敷に上がる一方で、「澄子」はまた部屋に籠ってしまふ。

ここまでは、「珠江」を視点人物としているが、夜に「眞鍋」が「珠江」に会いに来てからは、語りの視点人物は「眞鍋」へと移り変わる。そして翌朝に「眞鍋」が自動車に乗って帰っていく時点から、三人称語りの視点人物は再び「珠江」へと戻される。そして「珠江」は思いがけず「澄子」の死に直面することになる。「澄子」の死をめぐる途中で「珠江」の仕事の仲間、「静子」の内心描述もすこし挿入されるが、作品の基本的な構造としては、主要視点人物が、女性の「珠江」から男性の「眞鍋」へと変更され、またそれぞれの自身の南方での生活をめぐる語りが交互に構成されるという特徴が認められる。

林芙美子のこのような作品の方法、語りの転換に関する論考は管見の

限り見当たらないが、「ボルネオ ダイヤ」以降に発表した作品、例えば「晩菊」の田部、「浮雲」の富岡も視点人物になって、女性主人公への思いが語られている段落が見られ、同様に主人公である男女が交互に視点人物となつて語るといふ構造が認められる。「浮雲」では男性主人公「富岡」の胸中の不安がこの構造を通して語られたりするなど、物語に両面性が内包されている。勿論、作品によつてそれぞれ機能は異なるとも考えられるが、本論では、これまで注目されてこなかった「ボルネオ ダイヤ」の語りの方法を取りあげ、「戦時下」という時局の中の「銃後」と「南方」の女性への描写や、このような視点の交代という作品の構造がどのような効果をもたらしているのかを考察する。

一 女の語り

作品の冒頭から、南洋の熱帯性を感じさせる描写が随所に見られる。「水の上を一日ちゆう漂うてゐた布袋草」、「漕ぎ出てゐる漕ぎ出てゐる小舟」、マングローブの茂った土手沿いに、休みなく毎日毎日夕方に「細引のやうな太い雨」が降り、「湯煙をたててゐるやうな激しさで四圍が乳色に染つてくる」、「椰子で作った扇子」などの描写によつて、「ボルネオのバンチャルマシン」の幾分のんびりした、内地とは大いに異なる南方の空間感覚が表現されている。また、布袋草には「イロシイロン」、小舟には「タンバガン」、扇子には「キッパス」、女中には「パウ」、下男には「ジョンゴス」と、丁寧に現地の読みも表記されている。「どの部屋にも粗末な疊が敷かれてゐて、塗りの荒い卓子が置いて

あつた。外地から来る上官の爲には床の間のある部屋もつくつてあつた。床の間には富士山の軸がさがつてゐたし、唐獅子のやうな妙な置物も置いてあつた。畸形的な日本の部屋のかつかうが、かへつて熱帯地では貧弱に見えた」と、語り手は外地と内地との差異を対照的に示している。

また、「ジャワ人の女按摩」、「ダイヤ族のバブウ下女」、「管理人のジスン族」などの多民族、多人種の社会であることも注意深く書き込まれているが、この作品は、ある種紀行文のようでもあり、現地ルポの性格を有しているようにも見える。また、それと同時に、「落魄」の運命を抱えた女性の悲しげな心象風景が、その地理風景に反映されているようにも読めるようである。

「球江」は十七歳の若さで松谷という男と駆け落ちをし、娘を出産したがすぐに手放さなければならなかった。「家出をして松谷の下宿に一緒に住むやうになつてはじめて」、「球江」は自分の運命が「だんだん正常でないことに気づき」、「何となく物哀しい気持ちになつてゐた」。「球江」は自分の人生が次第に狂い始めていることをうすうす感じながら、何となく物哀しい気分には陥るが、そんな時、次のような出来事が起こる。

熱海の旅館の主人だといふ女にあつて、窮屈な内地の生活のなかであくせくしてゐるよりは、一つ南へ進出して働いてみてはどうかとうまいことを云はれて、球江は急にそんな氣になり、支度料としてその女主人から二千五百圓の金を貰つた。千圓を母親へ送り、あ

との千圓を松谷の下宿へ残しておいて、誰にも黙つて、球江は自分と同じやうな仲間の女達五人ばかりと廣島へと發つて行つたのだつた。

そこで「球江」は、一種の「もののはずみ」からボルネオに赴くこととなり、将校や兵隊や軍属を相手に客をとる毎日を過ごす。「ボルネオへ着いて、球江は始めの二三日は耐へられないやうな自責を感じてゐた。東京での約束とは何も彼も違つてゐて、ここでは軀を犠牲にするといふことだつた」。約束とは違ふということで匂わされているのは、その仕事単なる女給ではなく、酒場の女給で男客に仕えて接待する仕事を兼ねていたということであり、また、行く前に二千五百圓もの大金を二年契約として受け取っていることから言えば、東南アジアのからゆきさんのやうな海外出稼ぎの過酷な売春婦、あるいは従軍慰安婦のような仕事に従事しているものと考えられる。

「朝も夜もないやうな家のなかには、いつも將校や兵隊や軍属が詰めかけてゐた。下男が球江を何度となく呼びに來た。こんなことで二年も勤めるのではたまらないとぶりぶり腹をたてながら、それでも鏡の前に坐つて球江は化粧を始める」。このような描写から、「球江」たち五人の仲間が娼館で体を売つていたことがわかる。

松谷が自分を探してゐる姿が浮んで來ると、ふつと涙がつきあげてきた。もう一度東京へ戻りたいと思つた。ボルネオは二年といふ約束だけれども、二年ぶりに戻つて行つて、松谷をたづねて行つ

たら松谷はどうして迎へてくれるだらう……。

しかし、松谷が迎えにきてくれることを夢見ていたほどの「球江」の後悔の念は、すぐに消えてしまう。「球江」に新たに想い人ができたのである。相手は帝大出身、軍属としてボルネオに来ていた「眞鍋」であった。そこで「球江」は南方では、単なる落魄した慰安婦としてではなく、情熱的で能動的な主体となった。

二 男の語り

ボルネオで軍人相手に女給の仕事をする「球江」は、すぐに官学生出身の「眞鍋」に惹かれていった。しかし、彼女の思いは一方的なものでしかなかったらしく、ここから差し込まれる「眞鍋」視点からの語りでは、次の傍線部のように綴られている。

球江はすぐ眞鍋を好きになり、或日、インドネシアの女に化けて、四キロの道を歩いて眞鍋の官舎に遊びに行ったりしたこともある。
眞鍋も始めはものずきな女だと思つてゐたけれども、球江の激しい熱情には段々惹かされてゆくものがあつた。そのくせ、最後のところまでにはどうしても降りきれない潔癖さを眞鍋はもてあましてゐる。

「眞鍋」は「奥さんも子供もある」軍属であつたため、「不義はいけ

ない」という理由から、「最後のところまでにはどうしても降りきれない潔癖さ」で、「球江」との間に最後の一線を引いている。

内地の手近な工場の入口に立つてゐれば、球江のやうな平凡な顔はいくつも見られるだらう。何處といつてとりたてて云ふほどない平板な顔に、どうやら異彩を放つてゐるのは、小さい唇と、一皮目の柔和な眼であつた。見たやうな顔、誰もがさう思ふほどのなじみやすい顔である。

初対面から「眞鍋」に惚れた「球江」は、「眞鍋」と会つた翌日には現地女性のような恰好をして四キロも歩いて「眞鍋」の官舎を訪ねていったにもかかわらず、「眞鍋」から見れば「平凡な顔をしている」女性であつた。「眞鍋も始めはものずきな女だと思つて」閉口したが、その後「球江」の「激しい熱情」には段々惹かれていくものがあつたという。

だが、戦地にいながら、「眞鍋」には、彼なりの打算があつた。「帝大の採鑛冶金を出て、N殖産會社から、南ボルネオ占領と同時に、軍属として足掛二年もマルタプウラの小さい官舎に住んでゐる」彼は、自分の「官学生」という身分に無形の制限を感じ、「異郷での淋しい夜や、自分一人にだけささやいてもらへる異性の甘く優しい言葉は、眞鍋にとって何と快いもので」あつた。しかし、彼は「最後のところまでにはどうしても降りきれない潔癖さ」を頑なに守っていた。つまり、彼は「球江」と体の関係を結ぶことを避けていたのだが、「球江」のことを、ほかのからゆきさんと同じように、苦勞した生活を経て男性からお金を取

ろうとする現実的な女性だと見ていたのかもしれない。一方で「眞鍋」は、「皆の眼が光つてゐなかつたら」、「戦争でなかつたら」、「球江」と結婚したいという心にもないような言葉を投げてもいるのだが、外地に赴いたからゆきさんに注ぐまなざしは、世間一般のものと同じく変わりはなかつたであろう。ここでは「何となく、こゝは戦場といふところに氣兼ねあつた。無数の日本人の眼も怖ろしい。それにまた官學生の眞鍋には將來の「名譽」といふものも眼のさきにぶらさがつてゐる」とも語られている。

翌朝、「球江」の仲間、「澄子」が死んでいるのが発見され、大騒ぎになった。「球江」は「澄子」の死に対して、「昨夜、最後に分かれるまで、澄子の死ぬほどの悩みを考へられなかつた自分の浅はかさが自分で苦しかった」と、自責の念に苛まれる。しかし、「澄子」が自殺した原因は、一つはデング熱などで胸の病にかかつたためだとも、或いは思ひを寄せていた兵隊が亡くなつてしまつたショックによるものだとも考えられるが、澄子が死んだあと、もう一人の仕事仲間である「静子」によつて次のように語られる。

澄さんの好きな兵隊が、何故モロンプダックにやらされたかつていふのは知らないだらう？ 何ていふのかね、重營倉つていふのかねえ、あんなの食つて行つちやつたのさ、みんな、澄さんの爲なのさ、二人で逃げて土人に化けちやばうなんて考へてた位に思ひつめてたんだから、下手をすると、その兵隊は死刑よ、ねえ、思ひつめてたひとが死んでしまつたのだもの。

この言葉を信じるならば、その兵隊はからゆきさんとしての「澄子」を、心の底から愛していたことになる。「澄子」も、南方で女としての生のエネルギーを取り戻した内地女性である。それゆえ、「澄子」の死には、同時に、愛する人について行くという意味が生まれることにもなるのだが、その時、この兵隊の存在と対照的に浮かび上がってくるのは、外地としてのボルネオや、ボルネオでの「球江」との関係をあくまでも一時的なものとしつつ、「球江」とは一線を画しながら、自分の将来、自分の体裁を守ろうとしている「眞鍋」という人物の存在、そしてその造型である。その中で「球江」の女の語りを切断するかのような、「眞鍋」という男の語りが差し挟まれるが、ここでは、ダイヤモンドに魅惑され、ロマンに陶醉する自己像が描かれ、さらに自分の名譽、将来を最優先するような自己愛に抱かれる内地男性の人間像が顕在化してくるのである。

三 南方占領地にいる女性の身体

「球江」は、毎日戦士のような心構えで過酷な仕事をする健気な姿を見せており、それは女性の強靱さを示してもいた。彼女は内地では、仕事、家族、配給、愛する人、子どもなど、大事なものを一つずつ失つていつていき、自分の人生が半分狂いかけていると認識していたが、ボルネオでは自分を投げ出すような生活ぶりではなく、むしろ陽気にも毎日の挑戦を迎え入れ、自信を取り戻していくのである。

球江が座敷へ出てゆくと、いつものやうに、酒に亂れた連中が幾組も軍歌をうたつたり、議論をしたりしてゐた。澄子はかうした部屋には出て來なかつた。球江は強いブランドーを二三杯飲まされると、もういつものやうに陽氣な性分を取戻してゐた。何も考へることはない。金色燦然としたものが軀からエーテルのやうににじみ出てゐる。そして、どんな場所にも怖れることなく、力いっぱい情熱をこめて坐りこんでをられる。四ヶ月の彼女の歴史などは須臾のやうに消えていつてしまふのだ。自然に、何も彼も自分といふものが毀れてしまつたと安心してしまへば、どんなところにも平然と坐りこんでゐられた。辱かしいといふこともなくなつた。どの男も自分の前にはひざまづいてくる自信があつた。いまの生活が球江にとつて面白くないはずはない。

その自信と呼応するかのやうに、「球江」の媚態に満ちた姿、横たわる姿が、記号的な身体と化し、作品の随所に散りばめられていく。わざとらしいしぐさで、女性の白くて柔らかない身体を見せびらかすようなナルシズムが、例えば以下のような描写の中に見出される。

球江は裸で白い蚊帳のなかに腹這つてゐた。長い枕のやうなダッチワイフに兩足をのせて、まるで蛙を引き伸ばしたやうなかつかうでジャワ人の女按摩に軀を揉んでもらつてゐた。

酔つぱい香水の匂ひがした。球江は寝たまゝの姿で、眞鍋を見送つてゐた。

球江は不行儀に眞鍋の胸の上に兩脚を凭れさして、頭をベッドからずりおちさうなアクロバチックなかつかうで煙草を吸つてゐる。

球江は素直に扇風機を蚊帳の方へ向けて眞鍋のベッドへ行つた。そして癖のやうに球江は眞鍋の胸のあたりに頭をさしよせて、眞鍋の右の指を噛んだ。

色の白いふつくりした軀つきを、わざとみせびらかしてゐるやうな幼いしぐさで、球江はとりとめもない歌を小聲でうたつてゐる。

甘つたるい熱帯の風土、白い蚊帳を背景として、「球江」は体を道具とし、戦地の男性に慰めを与えている。性的な誘惑者を演じる上で、「球江」は、間違いなく一つの身体として記号化された女性の一人であつたが、それは「球江」だけではなく、内地から南方に赴き、軍隊を相手に仕事をしている他の「女」にも通ずる表象であつた。

「球江」に象徴される、記号的身体をもった女性を創出したことから、従来の男権至上的な思想軸が見え隠れすることになる。「球江」の運命は、戦争の展開に伴つて翻弄されていくような、悲惨な女性としてのそれであつたが、しかも家出をしたことで、配給がなくなり、たちまち生活難に陥る、という貧困に苦しむ姿でもあつた。このような戦時下女性

の身体と運命は、戦争の暴力性を如実に物語るものであった。

球江は髪結びの娘であつた。兄は中國と戦争が始まると同時に出征して、ウースン上陸で戦死してしまひ、次の兄は戦争を怖ろしがつて、自分から進んで軍需會社へ勤め口をみつめて水戸の工場へ行つてしまつた。球江はそのころ女學生であつたけれども、これも學業はそつちのけで、毎日全生徒が學校から工場通ひをしなければならなくなつてくると、球江はつくづくそんな生活が厭になつてきて、あと一年で卒業だといふ時に、母親には黙つて學校をやめてしまふと、上野驛の食堂へ給仕女の職をみつけた。

岩淵宏子が指摘しているように、「球江」のような売春婦たちは「表面的には自己の意思によつて売春をしているかにみえるが、そこには家や戦争といういわば国家の本質に直結する問題が深く絡んでいる」のである。⁶「球江」が南方へ赴くことになつた背景には、戦争によつて崩壊した家庭と學校の存在があつた。そして「ボルネオ ダイヤ」は「球江」という女の語り、そして「眞鍋」の男の語りを交互に働かせることによつて、「球江」と「眞鍋」という二人の恋愛話という顕在的なモチーフの背後に、厭戦的な男女二人の姿が浮き彫りにされていく。そこでは、自己陶醉的でありながらも胸中では自己流の打算を働かせ、また、ロマン的でありながらも現実的であるような矛盾する二面性が示されている。「ボルネオ ダイヤ」では、「南方」は、明るく魅惑的な風土として描写されているにもかかわらず、主要登場人物に強い虚無感を抱

かせるのである。そのような南方に生きる道を探ろうとする「球江」の姿は、どこか「浪漫的」でありながらも、現実に翻弄され、しかもそれと戦おうとする逞しさを示すものであり、そこには確かに南方に生きる女性の強靱な生命力が描かれているのである。

四 ダイヤの意味するもの

―「妻」にとつて

「眞鍋」の語りを通して知らされるのは、「眞鍋」が内地の「妻」に「大粒な最も素晴らしいコバルトダイヤ」を送つたものの、当の「妻」はそれをすぐさま政府へ供出してしまつた、という事実である。

妻からは、送つていたゞいたダイヤモンドは数日ならずして政府へ供出してしまひました。そして、何となく愛國的な氣持ちになり、あなたのお氣持ちを無にしなかつたことを讃めて下さいといふ見當違ひの手紙がとゞいた。自分の鑛區では二度とそのやうな美しい石は求められないだらうと思つたほどの逸品だつたので、眞鍋は妻の鈍感さに腹を立てて口惜しがつてゐた。まるで、印刷機械にかけ無数の活字のやうにしか考へられてゐない妻の寶石感が不慙でもあつた。日本の女は、本當の寶石の美や、その世界的な價值を知らないのだ。

「眞鍋」の銃後の「妻」は、軍属として南方占領地に赴いた「眞鍋」

よりも軍事化された人間である。「眞鍋」は、自分の鉱区で最も質のいいダイヤモンドを「妻」に送ったものの、「妻」はそれを軍需のためとして供出してしまふ。二人の価値観には明らかにすれ違いが見られ、当局のプロバガンダに加担する一枚岩であるかのような「妻」への苛立ちは、さらに日本の全ての女の鈍感さに対する不満へと拡大されていく。

「眞鍋」の銃後の「妻」は、戦争から逃げる形でボルネオに赴いた「球江」と共に二項対立的に編成されており、彼女は、その当時に溢れかえっていた、軍事化された銃後の単純な女性の典型でもあった。「眞鍋」が現地で苦勞して手に入れて送ってくれたダイヤモンドをあつけないく国に供出し、あまつさえそれを誇りに思っているようなところもあった。彼女にとつて、指輪に込めた夫の気持ちよりも、戦争の勝利のほう的大事であり、まさに戦時中の軍国主義的な言説を具現化したような人物であつた。

― 眞鍋にとつて

「眞鍋」は、ダイヤモンドの価値さえも分からない女、つまり自分の「妻」に対しては、はつきりした輕蔑は示さないまでも、「無智な侵略者」「失政を気づかないおろかさ」などとも「何か通じがあつてゐる」と見なししている。彼が「見當違ひ」の手紙に落胆するのは、戦争の本質を見透かしていたからにほかならない。

日々を多忙に追ひまくられてゐる荒びた女の指には、あまりに美しすぎるダイヤモンドの美は怖ろしいのかもしれない。流血の果てに

得た一つの土地が、無智な侵略者の爲に壓制を敷き、民衆を烏合とあなどり、失政を気づかないおろかさといふものは、ダイヤモンドの價值を知らない日本の女のこゝろと何か通じあつてゐるやうに考へられ、停滯しきつてゐるこのごろの軍政に眞鍋はそれを感じるのであつた。

そこから、すこしも自分の気持ちをわかつていないように見える「妻」よりも、戦争の本質を見抜き、国家に動員されることよりもボルネオで体売することを選んだ「球江」の戦争に対する姿勢のほうが、「眞鍋」と一脈通じあつてゐるようにも見える。

南方の激戦地にいる「眞鍋」自身は、ダイヤモンドの光沢に陶醉し、柔らかな女の肌を想像したりして、「色んな機械に利用されるダイヤモンドの効果よりも、美しい女の裝飾品としての聯想が眞鍋にはずつと愉しいものであつた」という。

黄色、すみれ色、紫、コバルト、ピンク、さまざまのダイヤモンドが、何萬といふ人夫を使つて天上の星の如く少しづつ砂の中から現はれて来る。その、ほんの少しづつ現はれて来るダイヤモンドは、内地の軍需工場であへなく消化されて、「石」自體のロマンティックな光澤の美は、鑛區を離れてゆくと同時に、流星が石に化してしまふが如く、はかなくその美を雲散霧消して、戦場の露となつてしまふのだ。

「眞鍋」にとつて、ダイヤモンドの光沢は「ロマンティック」で美しいものであったが、軍需工場ではただの石と見なされ、軍国のために「露」になるのは何とも惜しい気がした。それと同時に、「妻」は「眞鍋」の内心をすこしも理解しておらず、「妻」すなわち「本當の寶石の美や、その世界的な價值を知らない」日本の女も、軍国主義に洗脳され、その美しさを感じることができない、石のような存在となっていた。そこでは、自己陶醉するほどにロマン的な「眞鍋」とは対照的に、戦時下において軍事化され、感受性を失い、石になっている女性たちへの作者の批判の眼差しが暗に示されている。

― 球江にとつて

「球江」と二人が一緒に過ごした夜、「眞鍋」は「ボルネオのダイヤモンドは質のいゝものぢやアないけど、君の指輪になら丁度いゝだらう」と言つて、ダイヤを一つ取り出して「球江」に渡した。

「これ、どの位に賣れるもののなの？」その球江が、いつの場合も現実的で、ダイヤモンドをいくら位で賣れるものなのかときかれると、眞鍋は一寸ばかり興ざめた氣持ちになり、「さうだねえ、五六千圓には賣れるだらう」と球江を驚かせる心算で云つた。「まあ、こんな石が、そんなに高いものなの、吃驚したわア、それぢやア、わたしにとつては財産になるわよ。ほんとにそんなにするの？」球江はいつそう熱心にダイヤモンドを視つめてゐる。眞鍋が放心したやうに窓のそとを眺めてゐると、球江は眞鍋の首に抱きついて、汗

ばんだ頬を何度も接吻した。

「眞鍋」がからゆきさんの「球江」にダイヤを買いだのは、ほかでもない彼女の歡心を買うためであつただろう。しかし一方で、すぐにダイヤの値段を聞いてきた「球江」のことを現実的な女だと心の中で考え、そんな「球江」を「驚かせる心算で」値段を告げた。それにもかかわらず、「球江」は熱心にダイヤモンドをみつめ、「吃驚したわ」と言う。後になって「いくらぐらゐのものなのかと、率直に球江にたづねられたことが、いまではかへつて、眞鍋には氣持ちのいゝこと」にかわつても、「球江」に尋ねられたその時、「眞鍋」は、ただがっかりしたように窓の外を眺めるのである。この点は、二人のすれ違いをわかりやすく現わす描写であると言える。

そもそも、質がわるいダイヤを渡しつつ、女性に「君への指輪ならちようどいいでしょう」などと言つてのけるその言葉からは、その無礼さを隠そうなどという意図は微塵も感じられない。実際、彼は「二人は幾たびかかうしてよりそつては眠つてゐたけれども、まだ一度も軀の關係はな」いのだと、二人の間に微妙な距離を保っていることを語るのだが、その理由の一つとしては、やはり「眞鍋」が「球江」に本気で思ひを寄せていたわけではなかった、という事情も見えて取れるのである。

「球江」は「眞鍋」と別れてから、もういちどダイヤモンドを手に取り、それをじつと見つめる。

ふつと、何の關聯もないのに、別れた子供の顔が眼に浮んで來た。

黄色をおびた石の色が冷く光つてゐる。ダイヤモンドを手にするといふことは、生れて始めての経験で、球江にとつては微妙な気持ちだつた。指にあててみると、笑くぼのある寸のつまつた指には一寸淋しい石の色だ。

彼女は実際、ダイヤモンドそれ自体には大きな魅力を感じてはいなかった。コバルトは淋しい石の色だと思つたり、自分の「別れた子どもの顔」を思い出したりしている。冷たい石によつて自分の暖かい母性が喚起された。それにしても、彼女はまた、自分にはふさわしくないものだと判断し、おかみさんに売ろうという冷静さも見せていた。このような「球江」にこそ、ダイヤモンドのような光沢が投影されているのである。

終わりに

林芙美子は、一九四二年十月からの半年あまりの間、日本軍部の囑託で南方報道班員として南方占領地を回つた。その体験に材をとつたのが「ボルネオ ダイヤ」である。この作品の方法は、林芙美子の新しい試みと言える、女性主人公の運命の推移を描写するものであるが、男の語りもと入り入れ描写したことで、戦前の女性語りだけの作品とは一線が画されている。ボルネオの女給「球江」の語りと帝大出身の軍属「真鍋」の語りは、二人の齟齬を描きつつも共通項をも匂わせている。そこには表層的な対立とは異なる、もう一つの二項対立の構図が見え隠れする。男性と女性という対立項は一見顕在的であるように見えるものの、二

人の関係は、相手との触れ合いを希求すると同時に相互に自己愛が差し込まれるような、自己陶醉的な一面を共有するものでもあり、鏡像関係にある。しかしながら、「球江」が「真鍋」の本心を知らなかったのと同様に、「真鍋」も、「球江」の思いを全面的に把握はできていなかった。「球江」と「真鍋」、二人のそれぞれの語りから、その狭間には、ある種の「齟齬」が生まれていたことも見て取れる。

「真鍋」は、指輪をあげて「球江」の歓心を買おうとしたものの、心の中では、ダイヤモンドの美しさがわからず、現金的な価値しか脳裏にない「球江」を軽蔑していた。しかし、一方で、「真鍋」には知る由もないことだが、「球江」は実はダイヤモンドの金銭的な価値よりも、手離した子供のことを何度も思い返していた。ボルネオでは身体的に記号化された「女」としてのみ存在していたが、その陰に「母」としての温かい一面も隠されていたのである。そして、「真鍋」の男の語りから窺われるのは、もう一つの潜在的な二項対立図式である。すなわち、戦争の残酷さとその本質を認識している「球江」の対立項として、作品の表舞台には登場してこない「真鍋」の「妻」の存在が浮かび上がってくるのである。彼女はいまだに、自分も周りの人々も、戦争の勝利のためにはどんな犠牲をも惜しむことなく身を捧げるべきだと考え、戦争に対して絶対的な信仰を抱いている。戦争言説の真つただ中にいる、銃後の人々をわかりやすく代表するような存在である。「真鍋」はこのような「妻」の姿勢に呆れつつ、「愚か」、「鈍感」などと心の中で憤りを覚える。そして、その憤りは「妻」個人だけではなく、銃後の「日本の女」全体へと拡大されていくのである。

「ボルネオ ダイヤ」では、ボルネオという南方占領地で、それぞれの虚無感を抱きながらも人生を展開させていく男と女の姿が描かれている。それとあわせて占領地にいる人々と、内地にいる銃後の民衆との間で、戦争に対する姿勢がかけ離れていることも描かれ、「南方」と「銃後」、両者の明暗が対照的に示されている。南方の仄暗い虚無感が流れる中、「ボルネオ ダイヤ」は、そのような通奏低音としての「戦争」の暴力性をめぐる、軍国を信じる銃後の人々の愚かさへの批判の眼差しを含んだ作品として読み解くこともできるだろう。そのような視点から読みかえすことで、そこに隠された新たな意味がわれわれの前にはつきりと開示されてくるのである。

注

- (1) 陸軍の南方徴用は一九四一年十月から、一九四四年にかけて三回に分けて行われ、約八十人の文学者が南方に派遣されたといわれる。神谷忠孝、木村一信 編『南方徴用作家 戦争と文学』「序論」（世界思想社、一九四六年三月）、頁七―九参照。
- (2) 山下聖美には、「林芙美子『ボルネオダイヤ』を読む」（『日本大学芸術学部紀要』五十九、頁二七―三六、二〇一四）、「林芙美子が見た日本占領下インドネシアの日本語教育…スマトラ・バレンパンの瑞穂学園についての調査報告」（『日本大学芸術学部紀要』六十二、頁五―十二、二〇一五）、「日本軍政下インドネシアにおける林芙美子の文化工作…ジャカルタにおける足跡の紹介とともに」（『日本大学芸術学部紀要』六十八、頁五―十二、二〇一八）など多くの論文を発表している。また、

望月雅彦『林芙美子とボルネオ島』（ヤシの実ブックス、二〇〇八）にも詳細な検証がある。

- (3) 林芙美子「ボルネオ ダイヤ」の初出は一九四六年六月『改造』のちに『淪落』（関東出版、一九四七）に収録された。

- (4) 例えば、ジョーン・エリックソン「林芙美子を読み直す」（お茶の水女子大学『（国際）日本学との邂逅』頁八五、二〇〇二）では、林芙美子の作品を読解する際の特徴として、「登場人物と著者を重ね合わせて考えることが多い」と指摘されている。

- (5) 尹小娟は、「ボルネオ ダイヤ」「麗しき脊髄」「荒野の虹」「浮雲」を南方体験文学の作品群に位置づけ、その共通性を検証している。「林芙美子における戦後の南方体験表象の位相について―『ボルネオダイヤ』から『浮雲』へ」（『近代文学研究』三〇、二〇一七）頁四九―五二。ただし、「浮雲」の背景はベトナムであるが、林芙美子は実際にベトナムに足を運んだ経験はないようである。また、「ボルネオ ダイヤ」以外の南方体験作品は、南方と関係しながらも、作品の主要背景は戦後の日本となっている。

- (6) 岩淵宏子「売春婦たちの〈掟〉―林芙美子『ボルネオダイヤ』『牛肉』『骨』」（『買春と日本文学』東京堂、頁二三―二四、二〇〇二）

*テキストは『林芙美子全集第十二巻』（新潮社、一九五二）を使用した。傍線は引用者による。

（げん ぶんが、台湾・東呉大学・副教授）